

活動集団療法における甘えのあり方と情動調整機能の発達

Development of Amae and Affect Regulation Function in Activity Group Therapy

木村 能成 KIMURA, Yoshinari


● 国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科
Graduate School of Arts and Sciences, International Christian University

那須 里絵 NASU, Rie

● 国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科
Graduate School of Arts and Sciences, International Christian University

西村 馨 NISHIMURA, Kaoru

● 国際基督教大学
International Christian University

 **Keywords** 児童期男子, 甘え, 情動調整, 活動集団療法
childhood boy, amae, affect regulation, Activity Group Therapy

ABSTRACT

和文要旨：活動集団療法においては、発達障害や対人関係上のトラブルといった問題視されることが少ない「普通の」子どもであっても、グループでの遊びを通して自身の課題やなんらかの困難さが浮き彫りとなり、内面を掘り下げることが可能になる。それは問題解決や心理教育を目的としたグループでは見られない、活動集団療法独自の意義であると考ええる。筆者らが取り組んでいる活動集団療法における、あるメンバーの変化過程を通して、活動集団療法の可能性を考察した。一見普通に見える子どもであっても、感情のコントロールや、「甘え」のあり様においては、彼らなりの苦しみがありうるものであり、そうした子どもたちへの介入の方針を考察した。

This study aims to reveal the possibility of Activity Group Therapy which we have conducted by considering the psychological changes that were observed in one of the members. In Activity Group Therapy, some children considered to be “psychologically normal” reveal their psychological problems and work on their inner growth through playing in the group. This seems a unique feature of the Activity Group Therapy, not seen in the group that are “problem solving oriented group” or “psychological education oriented group”. Thus, in this paper, children’s psychological development can be promoted by “Amae (an attempting of a person to make an authority people, like parents, therapists, teachers or supervisor, take care of him/her) experience” and peer relationship in the group is suggested. Also, in this paper, it is suggested that children who seem to be “psychologically normal” sometimes have serious problems in affect regulation, and it is possible that Activity Group Therapy can offer the opportunity to develop psychologically for “normal” children who have difficulties in their affect regulation.

1. 問題と目的

1.1 活動集団療法の意義

Slavson (1950, 1952) は、家庭・学校・友人たちから居場所をなくした非行少年のためのグループワークを創始した。許容的な雰囲気の中でセラピストが「非解釈的」に関わるところに大きな特徴があり、子ども同士の関係の変化によって問題が改善していく過程を見出した。彼は、このような集団での治療について、個人心理療法や力動的精神医学と同様に正当な治療法であると主張してこれを「活動集団療法」と呼び、適応の範囲を広げながら治療論、技法論を構築していった。それがアメリカでの集団精神療法のひとつの基盤となった。

Scheidlinger (1960) が活動集団療法を修正して開発した体験的集団療法では、グループ環境は恒常性を提供するように慎重に設定され、メンバーがグループに愛着を抱くことで自我機能が健康的になっていき、自身のネガティブな情動に対処できるようになるとされている。

さらに、近年わが国では軽度発達障害にも注目が集まり、様々な心理療法的アプローチが発表されてきているが、集団精神療法は、子どもの自我理解や外界への積極性（滝吉・田中, 2009）、社会性の獲得や他者の情動理解（遠矢・針塚, 2006）について支援することが可能である。西村（2006, 2009）は児童期のグループ活動の意義についてまとめ、①身体的成長への寄与、②情緒的成長への

寄与、③知的成長への寄与、④対人関係技能への寄与であると述べている。鍋田（2007）は、これらの活動集団療法について「横並びの治療関係と群れ体験」を提供するものであり、子どもが体験を意味ある言葉として語る力を育むとした。さらに、活動を通して得られた物理的な接触は、子どもの愛着形成の上でも重要であると指摘されている（林, 2012）。

許容的な雰囲気の中で、子ども同士の関係の変化を促すというセラピストの視点は、現代でも意義深く、活動集団療法は、学業や適応上の問題の有無を問わず、児童の心理的発達を促進、支援する療法としての可能性をもっている（西村, 2006, 2009; 西村・木村・那須・加本・関戸・天笠ジェイムス・塚瀬, 2015）。

なぜならば、以下に述べる「甘え」と「情動調整」の問題が、単に臨床群のみに当てはまるのではなく、全般的な問題であるためである。また、甘えや情動調整という視点は、現代的な視点から「許容的な雰囲気」や「子ども同士の関係」というものを捉え直す上でも重要であるためである。

1.2 児童期男子の発達

児童期は、かつて Freud (1905) が潜伏期と呼んだように、幼児期と思春期に挟まれて、子どもは比較的穏やかに成長する時期であるとされてきた。また Blos (1967) は「潜伏期の間に、価値と重要性の感情を与えてくれる両親の保障への依存は、客観的で社会に是認されるような成就と熟達

による自尊心の感覚へ次第に交代していく。」と潜伏期の意義を規定した。特にBlos(1967)は、男子の発達において幾つかの特色が見られることを指摘した。まず、エディプス的ライバルである父親像を取り入れ「お父さんのような男性」という愛着を伴った同一化と理想化を用いることで、エディプス葛藤を抑え込む。また、対人関係においては、人間関係そのものを構築しようとするよりも、不安を否認し、大胆な行動への挑戦といった不安・恐怖に立ち向う仲間集団を目指して徒党を組むという。また、Sullivan(1953)は8歳以降の前思春期、青春期も重要な人格発展の時期であるとし、この時期の対人関係発達を理論化した。その中でSullivanは、児童期の友人関係を「ギャング」として概念化した。保坂・岡村(1986)は、集団精神療法に関する研究においてこれらの概念を発達させ、ギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループという3段階の仲間集団の発達位相の仮説をたてた。保坂ら(1986)によればギャング・グループとは小学校高学年ごろ、親からの分離個体化のために現れる徒党集団であり「外面的な同一行動による一体感を特徴とする。グループでは、コンパやゲーム、スポーツなど全員で同じ行動をとることによって仲間意識が持てるような状態で、主として言葉のやりとりより行動が優先される」とした。

1.3 現代の児童期と「甘え」

近年、学校では、授業中落ち着かなくて立ち歩く子ども、「死ね」「殺す」という言葉が飛び交い、「キレて」クラスメートに乱暴をふるうといった、自身の不快な情動をコントロールすることが難しい子どもが増えている(小谷, 2010)。また川畑(2012)は、この時期の小学生の中に、腹痛や頭痛などの身体症状を繰り返し訴えて、「世話」を求める子どもが多いことを指摘し、彼らが根底では親からの分離に対する不安を抱えていることを指摘し、それは「甘え」に関連した不安や怒り、悲しみ、恐怖、あきらめであるとした。

「甘え」とは、親しい二者関係を前提とした、相手から好かれて依存したいという感情である

(土居, 2000, 2001)。言い換えれば、相手は自分にに対し好意を持っていることがわかっていて、それをあてにして気ままに振舞うことである。ここで肝心なのは、相手の好意を分かっている、すなわち相手との関係の中で安心しているということである。児童期は、学校生活といった、親から離れて暮らすことを余儀なくされる時期であり、子どもたちは自身の甘えとどう向き合っているかを突きつけられる。言い換えれば、自身の不快な感情にどのように折り合いをつけるかが求められる時期なのである。生地(2012)によれば、「甘え」を乳幼児期のレベルでいつまでも求めようとする、対人関係や社会生活に支障をきたし、逆にかたくなに全く甘えないとなれば、人との信頼関係や絆を否定することにつながる。「甘え」との関係の度合いや質をどのようにするかが、その人の生き方、自己感、世界観に大きく影響し、それがうまくなされないと、次に続く思春期での自己と他者との関係をうまく処理することができず、自己の確立が困難となるという。

この問題は発達障害を抱えた子どもに対しても関連する。小林・鯨岡(2005)や小林(2012b)は、子ども、特に発達障害を抱えた子どもに関する問題とされる行動を、「甘え」の欲求に根ざす行動として理解することを提案し、矯正型・訓練型の治療に疑問を投げかけた。発達障害児の子どもに見られるわかりにくい行動・情動表出が、安心を求めるための行動や緊張感・落ち着かなさの表れであり、養育する側がそうした行動を、その子どもなりの内的状態を表現したものだとして受け止めることで、子どもの緊張感が徐々に弱まると指摘した。そして子どもの甘えようとする態度や、安心感を求める行動を「関係欲求」と呼び、治療者がそれを引き出すことが、子どもの好奇心を広げることにつながり、発達障害を抱えた子どもの治療にも有益であるとしたのである。

1.4 子どもの情動発達 一精神分析的視点から一

子どもの落ち着かなさ、対人関係における感情のコントロール不全といった問題に対して、治療

者や養育者がどのように関わるのが適切であるかということは、「甘え」の視点のみならず、情動発達に関わる精神分析的な視点から数多く論じられてきた（小林, 2012a）。

情動の調整機能の発達を促す養育者の役割について、従来の心理学では、身体的応答性の意義が重視されてきた。例えば、乳児の不快の程度が強い時、乳児自身が泣いたりぐずったりすることで、養育者に取り除いてもらうように促し、また養育者がそれに対して適切に応答することで、情動の調整をはかるというものである。その後乳児は養育者を「助けてくれる相手」とみなすようになり、見知らぬ人が近づくと養育者と身体接触を図り、自分の不安や恐怖を調整するようになるというものである。

精神分析学の観点からは、Winnicott（1958）が養育における母親の機能を、母親が乳児のニードに合わせて適切に乳房を提供するという、「抱える環境（holding environment）」を供給することにあるとした。すなわち、乳児は環境から提供されたものをあたかも自分自身が作り出したかのように錯覚して万能感を持つことができる。そこから母親の幼児への小さな不適応が起こり、幼児は次第に脱錯覚して現実を認識することができるようになる。この過程を経て乳児の本当の自己が育つことが可能であると考えたのである。また、Bion（1962）は母親と乳児の交流をコンテイング（containing）と名付けた。乳児が抱いた快・不快といった感情は、母親が夢想（reverie）という心の状態を受け皿にして母親自身の精神内界に受け止め、乳児が持ちこたえられる形に変えて乳児に返すという二者の精神水準での交流を示した。Winnicottの抱える環境は、身体的に乳児を抱えることで精神的にも抱えるという身体と精神が一体の存在として扱われている点でコンテイングと異なる点を含むが、いずれも重要な視点として現代精神分析臨床の中核をなしている。WinnicottやBionの述べた母子関係は、必ずしも現実の母親を想定していないという点で、後述する情動発達の理論とは大きく異なっている。

子どもの情動発達を促すものとして、乳児が表

出する情緒的なサインを母親が適切に応答するという情動応答性が注目されてきた。Bowlby（1958）は愛着理論において乳幼児から愛着を向けられた母親の中に、それに応えようとする自然な欲求からさまざまな情緒的な応答が生まれることを示唆している。初めて情動応答性という言葉を用いたMahler & Bergman（1975）は、母親の眼差し、表情が乳児の情緒をキャッチするものに向けられていること自体が意味を持つとした。Emde（1989）は、情緒的な自己の一貫した発達には喜び、驚き、興味などの肯定的感情が必要であり、社交性、探索、学習などが母親のこの情動応答性によって促進されるとした。

さらにStern（1985）は、乳幼児と母親の情緒的交流に焦点を当て、乳児の主観的情動体験に関する研究を進め、乳児が他者と共にいる感覚を知るきっかけとなる現象を見出した。これは情動調律（affect attunement）とよばれる。Stern（1985）は、情動には喜び、怒り、悲しみ、不安、驚き（Darwin, 1874）といったカテゴリー情動と異なる、強弱、長短、明暗の度合いやパターン、抑揚、リズム、トーンを示す勾配情動に注目した。勾配情動は絶え間ない「生気情動（vitality affects）」によって伝わり、人は自身の感情を、表情の変化や声のトーンによって、「はつらつ」としていると「沈んでいる」といったかたちで表現することができるという。乳児は、自分や他者の感情状態を「怒り」「喜び」という形で識別することはなく、他者の示す色々な行動を知覚し、それらがあらわす生気情動に基づいて行動を感知すると考えたのである。そして、情動調律によって、養育者は子どもの生気情動に応じて、別の知覚・行動様式で応答し、情動状態を共有するのである。

Stolorow, Brandchaft, & Atwood（1987）は、理想化された強さ、安心感、安全感などの源である養育者との一体感を幼少期に体験することが、不安、傷つきやすさなどをめぐる情動状態の統合において大きな役割を果たすと主張した。その際、養育者からのなだめ、なぐさめる反応は、子どもが自分をなだめる能力すなわち情動調整の能力を生み出し、不安耐性と全体的な安寧感に寄与する

と強調している。

1.5 脳科学の視点から

これらの精神分析的視点は、脳科学の視点からも裏付けがなされている。Schorer (2003) は、乳幼児の愛着行動を理解するために、愛着行動を不快体験への対処の姿としての「情動調整／ストレス反応システム」と捉えている。乳幼児が不快を感じたときに、養育者に接近し受容され、安心感・安全感の感情が喚起されることによって不快が調整されるという関係性の中で、子ども自身の情動調整にまつわる脳機能が発達すると考え、以下の内容を示唆した。

Schorer (2003) によれば、通常、私たちは子どもに対し「暴れてはいけない」「我慢しなくてはいけない」ということを理解させることによるトップダウン型の制御を求める。すなわち高次な認知機能を働かせて、意志の力で情動調整することを子どもに求める対応である。それに対して、愛着行動を通じたネガティブな情動の処理は、子どものネガティブな情動を承認したり、身体的な安心感を与えたりすることで、子どもが落ち着きを取り戻すように働きかけるというものである。これは、情動を司る扁桃体への働きかけであり、ボトムアップ型の情動調整であるとした。感情を爆発させている子どもに有効なのは、この安心感による調整なのであり、叱責や説得による調整は、過覚醒状態をエスカレートさせるか、解離反応を引き出すことにしかならないのである。

愛着研究者の遠藤 (2005) は、Bowlby が最初に示した愛着の定義が「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特別の対象との近接を求め、またこれを維持しようとする個体（人間やその他の動物）の傾性である」である点に注目し、「この近接関係の確立・維持を通して、自らが“安全であるという感覚 (felt security)”を確保しようとするところに多くの生物個体の本性があるのだと考えていた」と述べている。したがって、愛着システムをネガティブな感情を処理するシステムととらえるものの見方は、Bowlby が着目していた愛着概念とも関わっていると考え

られる。

さらに、Tucker, Luu, & Derryberry (2005) は、愛着の起源を、脳が痛みを生じないように進化したことにあるとした。そして、痛みを予防したいという欲求に基づく行為として、母親が子どもを保護する関係性が生じたという。痛みには発声（悲鳴、うめきなど）が伴う。情動性発声 (vocalization) といわれるこの発声は、鳥や哺乳類などの仔が母と引き離される時にも発せられ、それにより母親は仔を保護し守るという。ヒトにおいても、子は痛みの危機を情動性発声 (vocalization) によって知らせ、母親はそれを内臓感覚レベルでキャッチして保護することを通して子どもの命を守り、親子の愛着という親行動の脳内メカニズムを発達させたのである。母との接触により、子の脳内では鎮静物質が分泌され、痛みを緩和するという愛着のメカニズムが発達したのではないかと考えたのである。

前述の情動調律 (Stern, 1985) では内臓感覚レベルと理性的なレベルの両方の共感行動が用いられていると考えられる。母親は内臓感覚レベルで子どもの情動性発声に反応し、意識的にそれに適した応答を行う。それによって子どもは安心感が喚起され、それによってネガティブな情動は調整されるのである。したがって、Stern (1985) が描いた精神分析的な母子関係の世界と、Schorer (2003) や Tucker et al. (2005) が示した脳科学的な視点にも重なりがあると考えられる。

1.6 「よい子」の危うさ

情動調整の問題は、虐待等の不適切な養育環境に起因する（遠藤・石井・佐久間, 2014）ために注目されてきたが、大河原 (2010, 2015) は自身の臨床経験から、「よい子」を求められている環境においても同様のことが生じていることを示した。虐待的な養育環境と、過剰に「よい子」を育てる養育環境において共通していることとして、親が子どもの生理現象としての情動（痛い・怖い・不快・不安などによる子どもの「ぐずぐず」の表出も含む）否定するコミュニケーションが展開されている点を指摘した。たとえば「痛い」と

感じたときに「痛くない」という形で自分の身体感覚を制御することを求められた子どもは、自身の身体感覚を解離させて適応しているので、自分の中の怒りや憎しみ、恐怖といった不快な感情を抱いても養育者・援助者の前では表出しなくなるのである。さらに、それによって、彼らは対人不安、恐怖感を常に抱えることとなり、自己主張がむずかしくなる。そして、なんらかの不快な感情を抱えていても、そのつらさを解離させて生きることが長期にわたると、封印されていた怒りが爆発するといったことがある。日本においては、虐待などの不適切な養育環境ではなくとも、わが子を「よい子」に育てたいと熱心に関わる育て方においても、結果として情動の発達不全が起りやすいことを指摘しているのである。

したがって、精神分析と脳科学の視点から考えると、自身の情動を統制する機能の発達を促すために必要なことは、子どもが泣いたりぐずったりすることを否定することではなく、その情動を調律していくことで「一緒にいる」という感覚を共有することであったり、叱責ではなく落ち着きを取り戻せるような関わりを行うことであるといえる。そこにおいて子どもは、自身の悲しみが承認されることを知り、不快感情を解離させずともよい状態に導かれるのである。

小林（2012a, 2012b）や大河原（2015）らの知見をまとめれば、子どもの情動の調整の難しさは、養育者を中心とした、現実の周囲の人間との関係の中で、自身の情緒を調律してもらう体験が乏しく、うまく甘えることができないことによって生じているのだと言えよう。さらにはそういった子どもの精神的危機は、現在の適応上の問題の有無を越えたところにあると言ってよい。

1.7 本研究の目的

本研究では、活動集団療法の特色とされる「許容的な雰囲気」「関係」の意味について甘え・情動調整の観点から検討する。これらの特色は、未だ明確に論じられてはならず、考察の余地があるためである。Slavsonが活動集団療法の「許容的な雰囲気」や子ども同士の関係の変化と呼んだも

のの中で働いているのは、子どもの情動発達の視点から考えると、子どもが自身の感情の正当性を認められ、彼らの関係欲求が引き出され、子どもが素直に「甘え」を表現できるようになることでありと整理されよう。活動集団療法が、このような視点を持つことで、一見「普通」と思われる、すなわち現在適応上の問題を示していない子どもであっても、彼らが抱えている課題や心理的危機を理解し、心理的発達を支援する手法として有効であるということを、事例を基に考察したい。

2. 事例

2.1.1 本研究で取り上げるメンバーの概要：A（参加時小1）：一人っ子で、共働き家庭に育つ。やせ型。おしゃれな洋服を着て参加することが多い。発達障害の診断はない。学校での適応の問題や、学業の問題といったものについても報告されていなかった。むしろ知的な能力は高かった。ただ、遊びは自己完結していて、仲間関係は乏しく、スタッフとの関わりを求めがちな様子が当初から見られた。

2.1.2 メンバーの参加経緯：母親が知り合いから紹介されて参加した。母親の期待としては「のびのびとした子に育って欲しい」というもので、A本人の希望としては「いろいろ遊びたい」というものだった。

2.2.1 グループの概要：小学生児童を対象とした活動集団療法。X年のスタッフは2名。活動は男女各1グループずつに分かれ、毎週2時間、大学施設や中庭で行われる。学期の始めと終わりに、保護者・子どもそれぞれとの面談を実施している。本グループは「のびのびと自由に遊ぶ」、「仲間と遊んで元気になる」ことを目的とし、問題や障害の有無を問わない。

2.2.2 グループのメンバー構成：X年は男子グループに小学2～5年生が8名在籍。学業や適応上の問題のない「普通の」子ども、学校不適応の子ども（発達障害を有するものも含む）の混合である。男子グループは、男性の臨床心理士Wと女性の臨床心理士Yがスタッフとして運営してい

る。スーパーヴァイザー（教員、1名）が各グループのスタッフのサポートや、親グループを務めている。筆者は、X-2年からスタッフとして参加した。

2.2.3 プログラム：毎週1セッション、2時間行っている。内容は、①勉強（宿題などの教材に取り組み、必要に応じて指導する）、②スポーツなどの身体活動（主に屋外）、③自己表現活動の3本立てで構造化されている。

2.2.4 グループのルール：活動に参加すること、伝えたいことを言葉で表現すること、他メンバーの発言をしっかりと聞くこと、暴力の禁止などをルールとしている。

3. 事例展開の過程

第1期（X-4年～X-2年）：Aは小学1年（X-4年）から参加した。Aは参加当初から、グループメンバーと関わることは少ないが、萎縮した様子もなく一人で遊ぶことが多かった。たとえば、工作活動に積極的に取り組むが、道具が必要な際に「誰か取ってー」と言うが、特定の誰かに頼むということはず、孤独な印象を抱いたスタッフが世話をするようなことが繰り返された。

この時期のAは母親との間で独特の関係を繰り返していた。実は参加より少し前に、Aと母が自宅マンションにて転落死を目撃したが、母親が混乱して安定を取り戻すまでに時間がかかり、その後もAが目撃したのかどうか確認できないでいた。休暇中に祖父母宅に泊まった際に祖父母にうち明けていたのを母が耳にしたが、その間、A自身は乱れることなく生活していた。Aは、グループの日にごずりを見せ、母親を困らせていたが、いざ来ると楽しんでた。そのような様子を、母親は「Aには、このグループは楽しくないのかもしれない」と参加の意義を疑問視していた。そのようなことが繰り返されていた。

X-3年、震災後に母親がしばらく情緒不安定になったが、ここでもAは乱れずに、むしろ母を見守っていた。震災から2週間後のセッションで、Aは遊びの中で母をたたくなど攻撃的な様子を示

し、グループの活動から外れて走り回っていた。母親は「ここに来ると子どもが悪くなる」と言って参加を止めようとしたが、Aは活動に行きたがっていた。その年の夏、母と子で参加したキャンプでも、Aは母親に近づいていってはぐずることが繰り返された。母親はひどく困惑していた。スタッフは（そして、時に行われる親のグループでは他の親御さんも）、それが今のAにとって大切なことであると伝えたが、母はピンとこないままだった。

第2期（X-2年～X-1年）：グループ活動では、他メンバーに対して攻撃的な発言が増え、活動を抜け出したメンバーに対して「だったら帰れ！」と怒鳴ることさえあった。その時Wは、彼の発言を否定するのではなく、「Aはどんな気持ちだったの？」「他の子が抜けちゃって、活動を台無しにされた感じかな？」と聞くことで、彼が自身の気持ちを言葉にしていけることを手伝った。一方で、A自身が活動を放り出すことも多くなった。2人組になるゲームでは「あいつと組むのは嫌だ」とメンバーに対する不満を口にし、活動に参加しなかった。どんなところが嫌なのか、相手にどうして欲しいのかということは、聞いてみても「なんとなく」といった漠然とした応答であった。Y、WはAに活動に入るよう強要せず、しかし「今はあんまり気乗りしないんだね」適宜声をかけ、こちらがAを常に気にかけていることを伝え続けた。その後Aは、ある年少のメンバーの暴言に、別の年長のメンバーが「そんなこと言うなよ！」と応えた際に「言葉でなら嫌なことも言っていんだよ」と言い、他メンバーのネガティブな表現を受け止めるようになった。

夏のキャンプについては、X-2年は母親が「あの悪夢はもういい」と拒否したが、X-1年に、Aも成長したからと母親が途中参加の形をとった。Aは元気にしていたが、母親が来たとき急に体調を崩した。帰りの電車に乗る際も母親とWの前でぐずり、しゃがみこんでしまった（結局、母親とWが世話をし、ぎりぎり乗車できた）というエピソードがある。

第3期（X年）：5年生になり、Aは塾通いが増

え、母親は今年で活動をやめたいと言い出した。Aは突然スタッフにおんぶや肩車を要求したり、勉強をみてほしがったりすることが増え、素直に甘えるようになった（同学年の別のメンバーは、頻繁にスタッフにおんぶをねだったが、Aがそれまでおんぶを頼むことはなかった）。おんぶをした際Wが「お父さんにもこういうふうにおんぶしてもらったりするの？」と聞くと「父さんと遊ぶことはあまりない」と語った。母の日のメッセージ作り活動では、Wは父、Yは母だと言った。それらと並行して、活動に対しても積極的に参加するようになり、汗みどろになって仲間と遊ぶ姿が見られた。同学年の複数のメンバーとからかいあったり、身体を使って競争したりすることが増えた。また、これまで、自分の作品を自慢して終わることが多いAだったが、あるセッションでは自らが作った紙飛行機を「すげえ飛んでる、いいなあー」と羨ましがった他のメンバーに、作り方を教えプレゼントするなど、仲間に対する態度も変化が見られた。夏のキャンプでは、これまで母親に参加を求めていたが、母親がいなくても参加すると宣言し多くの仲間と過ごせた。X年秋には、「誕生日おめでとう」というWの言葉に対して「よいしょしてる。そんな関係いらない」と、大人に対して本気での関わりを求めるようになった。この言葉に対して、Wはどきりとしつつも「おだてられる、嘘をつかれているような気持ちになるんだね」と伝えると「そう」と答えた。

X年冬、Aは塾通いが増え、めっきり参加が減った。継続について尋ねると「ここは俺にとってOUTRAGE」と黒板に書き「ここは自由にいろんなことが考えられる場所」と言い、参加を続けたい気持ちがあると語った。だが同時に行きたい中学校があると語り、受験の準備のためにグループを卒業することを決めた。Aは、参加時からここに至るまで、親への不満を口にすることが一切なく、この卒業も親の意向が垣間見えたが、自分の選択としてきっぱりと巣立っていったのである。

4. 考察

4.1 Aの背景の理解

Aは、適応上問題ないとされていた「普通の子」子どもであり、問題視されることは少なかった。ところが実のところ、Aは情緒的に不安定となった母親を支える役目を負っていたことが、活動を続ける中で明らかになった。自殺の目撃事件や震災といった外傷的な出来事の後、Aは母親をなくさめ、自分が怖いと叫んだり、泣いたりすることをしない「いい子」であった。父親は単身赴任、実家も遠方という状態が重なり、彼をなくさめ、情動を調整する大人が周囲に不在となる状態が続いたのである。震災2週間後のセッションでは、Aは活動を自身の好きなように過ごす場所だと決めて、走り回っていたのだとわかる。これは一見すると「落ち着きがない」と思われてしまう行動であったが、「いい子」であることをやめようとする彼の心の機能が現れていることとして捉えられよう。母親がそれを見てAが活動に来るのを止めさせようとしたことのもっともである。彼女の養育のサポートは乏しく、母親自身が手助けの必要な時であっても、周りに甘えず、「いい親」でいなければならなかったのである。ただ、それはAの求めているもの、すなわちいい子以外の自分を認めて受け止めてもらうということとは合致しておらず、母親は余計に「ここに来ると悪い子になる」と苛立ちを募らせた。A自身も、なぜ自分が活動に来ると悪い子になってしまうのか、わからなかった。悪い子でいる時の感情を認めてもらうという体験が、なかなか得られなかったからであると思われる。グループはAにとって、母親以外の人間から「抱えられる」体験でもあったと考えられる。ただし、仲間との関係が展開していくためには母親との葛藤を時間をかけて解消していく必要があった。

X-3年、X-1年に参加した夏のキャンプでは、どちらも母親の前でぐずった。日常では甘えたくても甘えられなかったAは、キャンプという日常とは異なる場面の中で、スタッフのいるところで、ようやく「ぐずる」という形で自身の甘えを表現

していたのである。母親はそこで、彼の甘えを突き付けられ、ぐずりに付き合い続けることで、彼の甘えを少しながら受け入れていった。その後、彼は母親がいなくてもキャンプに来ることができたが、Aなりの折り合いをつけて納得し、自立することを選んだのではないだろうか。

また、なぜ彼が母親の前でぐずるようになったことを考えるとき、グループの影響は小さなものではなかったと思われる。グループの中で、彼は(のちに彼自身が語っているように)「ここでは、自分は自由にしているんだ」ということをどこかで感じ、母親をその世界に連れてこようとしたのではないだろうか。グループに来てからの彼のぐずりは、情緒のコントロールができないということよりも、今まで感じないようにしていたものを、感じ取れるようになったことを表現していたように考えられる。グループの中での体験が、彼と母親との関係に変化を及ぼしたのである。

4.2 グループにおけるAの変化過程

Aの遊び方にも変化が見られた。それまでのAは、遊びの際は一人で盛り上がり、他メンバーと遊ぶことは乏しかった。ところが、Aは第2期から他メンバーに対して攻撃的な発言(活動を抜け出したメンバーに対して「だったら帰れ!」など)をするようになり、メンバーとの接触を持ち始めた。スタッフは、彼の怒りが正当なものであるということを認め「他の子が抜けちゃって、楽しくやりたかった活動を台無しにされた感じかな?それは怒るよねえ」といった言葉で介入した。攻撃的な発言に対して、「そんなこと言ったらかわいそうじゃないか」といった形でAを「いい子」にしてしまうのではなく、Aの怒りや悲しみを他の言葉で表現できるような機会を設け続けたのである。

同時期に、彼はスタッフに対して「おんぶ」など身体を使って思い切り遊んでもらう体験を求めた。彼はその際、「父親からおんぶしてもらうことは少ない」と寂しさをそのまま語った。このとき彼は「いい子」になるのではなく、無邪気に甘え、寂しさを強がることなく語っている。遊びを

通して、彼が多くの怒りや寂しさ、甘えられない不満を蓄積していることが理解されたのである。そしてAは、「Wは父、Yは母」というように、スタッフとの関係の中で安心感を覚えられたからこそ、そこから仲間関係や、愛他性が成長したと考えられる。彼が仲間と泥まみれになって遊んだり、仲間に対してプレゼントを発揮できるようになったことの背景には、まず自身の内にあるさまざまな気持ちが正当であるということ、いい子にならなくてもいいのだということを周囲の関わりの中で知ったのだと推測される。Aが受験のため卒業を決めたとき、彼は親や希望に流されて受験を選んだのではなく、自分の進みたい学校を見つけ、受験を決意した。主体的に自分の進路を選択したのである。そこには、「いい子」になって親のために頑張ろうとするAの姿はなく、自身のために決断をしたAの姿があった。

4.3 集団で活動することの意義

Aは、スタッフとの関係性を構築したのち、仲間との関係を展開させていった。参加当初は一人で遊び、グループで友達を作る様子はなかったAだったが、同年代のメンバーとともに、徒党を組んで冗談を言い合ったり、汗みどろになって遊ぶようになった。これはAが仲間集団の中で、自ら年齢相応の仲間関係を展開させたことを示している。このような遊び・関わり方の変化は、スタッフや保護者との関わりだけは実現が難しいことであり、集団の中で活動することの意義が認められよう。

また、集団の中で、怒りから暴言を発した年少のメンバーに対して年上のメンバーは「そんなこと言うな!」とそのメンバーを責めたが、「言葉でなら嫌なことを言ってもいいんだよ」とその発言を肯定した。A自身が他者のネガティブな感情表現を認められるようになったことが明らかになった。A自身がそれまでスタッフや他メンバーとの関わりの中で、怒りといった感情の表出を許容されてきたことが、今度はA自身が他メンバー(特に年少)の感情の表出を助けるようになったのではないだろうか。それはグループそのものの

安全感をより高める態度でもあったように考えられる。

4. 4 セラピストとして必要な関わり

上記の過程から、セラピストとして必要ないくつかの姿勢が浮かび上がってこよう。ひとつは、大河原（2015）が述べているように、怒りや悲しみといった、あって当たり前の感情が正当であることを認めることである。活動の中で何か不快なことがあって当然の場面であれば、「大丈夫だった？」とこちらから声をかけることが必要であろう。怒ったり泣いたりすることが乏しい「いい子」であればなおさらである。本人は「大丈夫だよ」と言うかもしれないし「別に」といった答えをするかもしれないが、「今のはすごく嫌な気持ちになっただろうと思ったんだよ」と伝えることで、嫌な気持ちになることもあって当然ということを伝え続けるのである。ただし、実際にそうした関わりが功を奏し、子どもの中に「嫌だった」と言える機能が育っているかどうかは、それだけではわからず、子どもとの関係の中で模索、査定していく必要があるだろう。

ぐずったり、わめいたりといった態度は、歓迎すべきことでもある。彼らは屈折した形で「甘え」を表出しているのであり、わかりづらいが「人とつながりたい」「わかってほしい」というメッセージが込められている。セラピストは、彼らの不快感情を承認しつつ、グループの枠組みは変えないという形で彼らの「甘え」を受け止める。ここで、グループの枠組みを変えることはしないということも同時に重要である。セラピストは「甘え」をそのまま受け入れるのではなく、甘えを求める背後にどのような心情があるのか、推測して言葉にして返していく必要がある。こちらが彼らの情動を調律していくことで、子どもの中にも自らをなだめる情動調整機能が育つのである。そしてそのためには、具体的にどのような場面で情動をコントロールできなくなるのかということや、それは特定の個人との間でおこりうることなのか、そしてその個人とどのような関係にあるのかを日頃から観察し、査定する必要がある。彼らの心情を「正

当なもの」として認めるための文脈をまずこちらが持つことが必要になるのである。

5. 結論

本研究を通じて、活動集団療法は、Aのような、適応上の問題を示さない「普通」の子どもに対しても、心理的成長を促す手法として有効であると明らかになった。そうした子どもは甘えたくても甘えられない「いい子」という形でグループに参加してきているかもしれず、たとえ問題視されることの少ない子どもであっても、家族関係のありようや、グループでの遊びの様子を丁寧に観察する必要があることもわかった。

そして「ぐずり」といった屈折した甘えの表出や、他メンバーに対する攻撃的な感情の表出を経て、その子どもの「いい子」の殻はようやく緩んでくる。セラピスト・スタッフはそうした子どもの態度を叱責したり、しつけるのではなく、その子どもの怒りや悲しみ、悔しさ、甘えたい気持ちが正当なものとして扱われるきっかけとして、歓迎する必要があるだろう。ただ、グループでの活動の場合、他の子どもの欲求もあることから、特定メンバーのみに関心を向け続けることは望ましいこととはいえない。個々のメンバーの欲求と、それをグループでどのように扱うかということを、本研究の今後の課題としたい。

引用文献

- Blos, P. (1967). *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. The Free Press, New York, London.
(野沢栄司 (訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房)
- Bion, W. R. (1962). *Learning from Experiences*. Heinemann, London. (福本修 (訳) (1999) 経験から学ぶこと 精神分析の方法Ⅰ—セブンセヴァンツ 法政大学出版局)
- Bowlby, J. (1958). The Nature of the Child's Tie to His Mother. *International Journal of Psychoanalysis*, 39, 350-371.
- 西村馨 (2006). 児童・思春期に対するグループ介入の基本問題と展開可能性：学校でうまくいかない子どもを中心に 教育研究, 47, 161-174.
- 西村馨 (2009). 児童期グループ 小谷英文 グルー

- ブ・セラピーの現在 現代のエスプリ7月号 (pp.169-178) ぎょうせい
- 西村馨・木村能成・那須里絵・加本有希・関戸直子・天竺ジェイムスジョンソン・塚瀬将之 (2015). 児童活動集団療法の一手法: 関係性の視点からの考察と可能性 心理臨床学研究, 33, 310-315.
- Darwin, C. (1874). *The Descent of Man*. Hurst, New York (石田周三 (訳) (1949). 人間の由来. 改造社)
- 土居健郎 (2000). 土居健郎選集 2「甘え」理論の展開 岩波書店.
- 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂.
- Emde, R. N. (1989). Towards a Psychoanalytic Theory of Affect, II: Emotional development and signaling in infancy. *The Course of Life, Vol.1* (eds. Greenspan, S. Pollack & G. H.). International Universities Press.
- 遠藤利彦 (2005). 第1章 アタッチメント理論の基本的枠組み. 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- 遠藤利彦・石井佑可子・佐久間路子 (2014). よくわかる情動発達 ミネルヴァ書房.
- Freud, S. (1905). Three Essays on the Theory of Sexuality. (フロイト, S. 懸田克躬 (訳) (1969). 性に関する三つの論文 フロイト著作集第5巻 人文書院)
- 保坂亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 川畑友二 (2012). 「甘え」理論と臨床実践 学童期 小林隆児・遠藤利彦 甘えとアタッチメント (pp.138-149) 遠見書房
- 小林隆児・鯨岡峻 (2005). 自閉症の関係発達臨床 日本評論社.
- 小林隆児 (2010). メタファーと精神療法 精神療法, 36, 517-526.
- 小林隆児 (2012a). 関係から見た発達障碍 金剛出版
- 小林隆児 (2012b). 「甘え」(土居)と“Vitality Affects”(Stern) — 「甘え」理論はなぜ誤解や批判を生みやすいか 精神分析研究 56, 134-144.
- 小谷英文 (2010). 現代心理療法入門 PAS心理教育研究所出版部.
- Mahler, M. S. & Bergman, A. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant: Symbiosis and Individuation*. New York.
- 生地新 (2012). 「甘え」理論と臨床実践 思春期・青年期 小林隆児・遠藤利彦 甘えとアタッチメント (pp.138-149) 遠見書房
- 大河原美以 (2010). 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (1) — 「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性 — 東京学芸大学紀要総合教育科学系I, 61, 121-135.
- 大河原美以 (2015). 子どもの感情コントロールと心理臨床 日本評論社
- Schore, A. N. (2003). *Affect Dysregulation and Disorders of the Self*. W. W. New York: Norton & Company.
- Scheidlinger, S. (1960) Experimental Group Treatment of Severely Deprived Latency-Age Children. *American Journal of Orthopsychiatry*, 30, 356-368.
- Slavson, S. R. (1950). *Analytic Group Psychotherapy*. Columbia University Press.
- Slavson, S. R. (1952). *Child Psychotherapy* (p.29). Columbia University Press.
- Stern, D. N. (1985). *The Interpersonal World of The Infant: A View From Psychoanalysis and Developmental Psychology*. New York. (小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) (1989, 1991) 乳児の対人世界 理論編, 臨床編 岩崎学術出版社)
- Stolorow, R., Brandchaft, B. & Atwood, G. (1987). *Psychoanalytic Treatment: An Intersubjective Approach*. New Jersey: Analytic Press. (丸田俊彦 (訳) (1995). 間主観的アプローチ 岩崎学術出版)
- Sullivan, H. S. (1953). *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. W. W. Norton, New York. (中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鎌幹八郎訳 (1990) 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- 滝吉美知香・田中真理 (2009). あるアスペルガー障害者における自己理解の変容過程-心理劇のロールプレイングを通して 心理臨床学研究, 27, 195-207.
- Tucker, D. M., Luu, P. & Derryberry, D. (2005). Love Hurts: the evolution of empathic concern through the encephalization of nociceptive capacity, *Development and Psychopathology*, 17, 699-713.
- 遠矢浩一・針塚進 (2006). 軽度発達障害児のためのグループセラピー ナカニシヤ出版
- Winnicott, D. W. (1958). *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*. Tavistock, London. (北山修 (監訳) (1989, 1990) 小児医学から児童分析ヘーウィニコット臨床論文集1 児童分析から精神分析ヘーウィニコット臨床論文集2 岩崎学術出版社)

